

日本古典文学の巫祝性

鶉 殿 正 元

私は日本の上代文学に記紀・風土記・万葉集などの研究を進めて行く上に、どうしても、日本古代社会に行なわれた巫祝性や、呪術信仰がどのようなものであったかという問題についての解明がされねば、上代文学全般の解釈が成立たない場合が多々あること、又、日本神話や伝説の体系的研究がこの巫祝性研究を進めねば前進しないのではないかと考えている。そこで、私は日本の文化圏と、周囲の文化圏を設定する仕事をはじめた。北方大陸系の文化圏と南方系の文化圏とを設定して、その文化圏の波及した状態を日本の上代とみて、その古典に露出している資料を、拡大された「残存」の構成分子として之を分析究明しようと思考するわけである。

例えば、私は、日本の神話体系として、二つに分類してみる。一つは天降り型、之を垂直型表象神話系とみる。主として高天原神話は母系的支配者文化で、女家長的女酋制である。例えば天の岩戸神話のモチーフは南支那・苗族、アッサムのカーン族、ナーガ族などにも見られるし、高皇産靈神の信仰も先住の母権的民族としての共通制をもっている。日本のシャーマンは北方系と南方系とあるが、天の沼矛の神話にしても、天浮橋はやはり大陸系のシャーマニズムの思想で、チベットも天繩（稗繩）の杵の思想で明らかに、当時の南方海人族と北方大陸民族との混合重層思想の上に立てられた神話と思われるのである。

一方水平表象型神話として、来訪者、彼岸から訪れる神は、妣の国に居り、地下界、根の国から来る神、又は島伝いに寄り来る神の神話系がある。この神話系はメラネシア、ニューギニア等及び東南アジア等で、之等は死者崇拜、

祖靈崇拜、母系祖先的色彩が強い。つまり南方系海洋民族として海人族、隼人族、などはこの系譜に入るものと考えられる。しかし、天降り型の天神高皇産靈神にしても、父系的支配者文化であり、父長権的支配者文化でもあり、父系祖先的英雄的傾向が強い。之は垂直的表象として類似せる朝鮮、中央アジア、シベリアの諸民族、北方系大陸民族（繩文式文化人）と水平的表象の南方系民族とが日本において結合し、その神話体系に二つの神話体系の混合が行なわれ、その重層性が生じたものと考えられる。

二、日本周辺のシャーマン

さて、日本の神社神道以前における原始神道ともいべき小国家分立の古代国家の時代から、次第に統一国家に発展して行く過程にどのような巫祝性を持っていたか、又その原始神道の巫祝性が古代の我国の社会制度と如何なる関係があったかということを明らかにし、更に日本の巫女の系統を考えると同時に日本周辺民族のシャーマニズムについて検討してみる必要がある。これによつて、日本古典にみえる呪術行為や巫祝性が、いかなる基盤の上に発生し、信仰され、文芸化されたかという根本的問題を解明したいわけである。

日本の古典には巫祝としての宗教的性格が政治的性格と結びついて政教一致としての中心的指導者としての位置を有していたのが巫女であったことが歴史的事実に徴して明らかである。先ず最初に挙げられるのは魏志倭人伝の邪馬台国の卑弥呼女王と、日本書紀における神功皇后の両者であつて、我国最高の巫女としての位置を占むべき事例とすべきである。西紀五七年（光武帝中元二年）に倭の奴国が漢に朝貢奉賀して光武帝から印綬を受けたという後漢書東夷列伝の記事が畿原すなわち九州福岡附近に比定される一小国家であり、それから東北方に倭国という邪馬台国が北九州に存在したということは近世国学者の主張より漸く現在の史家から之を認められつつあるのである。この小国家の統率者の大官は「卑狗」、副官は「卑奴母離」と呼ばれていた。この文字に従つて「日(火)子」「日(火)守」であり、原始共同体の生活における宗教行事の主宰者であつた。女子は日女子であり、男子は卑狗日子と区別され、日守は巫女の役割をはたし、一国の政治的權威に対する宗教的權威を象徴するものである。ヒミコは「年長じて嫁せず、鬼道に仕えて、能く衆を惑わす」といひ、「婢千人を以て自ら侍し」とある如く、小国家分立の倭国の連邦国家の内乱

を統一して邪馬台国を確固として保持し、その政治的権力をも併せ持った巫女ヒミコこそ我国最高の巫女、呪術者の風貌を伝えてゐる。ヒミコには男弟があつてよく姉ヒミコを輔けて国を治定したとあるのは、嘗て琉球に行なわれた神託を聞く女君が酋長であつたのが進んで姉（又は妹）なる女君の託宣によつて弟（又は兄）なる酋長が政治を行った時代を想起せしむるものであり、これに類似した制度が、古代日本にも古く存したと考えられるのである。又倭人伝に拠れば、死後に宗家を王に立てたとあるのは、巫女の相続が女系を主体としたことを伝承した記事である。又、倭国の所在が九州か畿内か、又卑弥呼が倭姫命か神功皇后かという問題も有るが、これは今史家にゆずることにして、私はその巫祝性のみを考えて行きたい。

次には、仲哀天皇の生前、神功皇后は神懸りの巫女の資格が新羅遠征を主張し、天皇崩御後自ら神主となられて斎宮に入られて神の教を承わつて、祭祀と祈請とを通じてつねに神靈と交通する事によつて、征戦の大業を成功に導かれたという神功皇后紀の記事はまことに重要な問題を提供している。なをこの外景行紀の神夏磯媛、速津媛、泉媛、八女津媛などや、神武紀に見える菟狹津彦と並んでみえる菟狹津媛なども、宗教的性格の巫女の地位に立つ女性なのである。又、崇神紀の倭迹迹日百襲姫命や太田々根子を祭るべき夢告をされた倭迹速浅茅原目妙姫も同様、シャーマンの性格を持つ女性であつた。又、一般的に指摘されるのは天照大神の岩戸神話に見える天鈿女命の舞踏は女性シャーマンの神懸状態を表示する好例とされている。その際に鏡を崇拜する思想は注目すべき事柄である。すなわち太玉命が真榊の枝にかかげた祭器のうちに、八咫の鏡は中枝にかけられている。又天孫降臨の際にも天照大神が特に神鏡を天忍穗耳命に授けられて斎鏡とすべきことを告げられているなど、又日本武尊の征戦の際その乗船に鏡をかける蝦夷を征服したのもこの鏡の威力である。又仲哀紀にある如く筑紫の海人族が榊の大木を舷首に押し立て、上枝に白銅鏡をかけて天皇の南向を奉迎した記事も、鏡の威力を示したもので、鏡が巫祝行為に必要であることは、朝鮮の巫鏡と全く同じである。鳥居竜蔵博士の調査によると、満洲、東蒙古、バイカル湖附近のツングース族のシャーマンは鏡を持たねばその機能を發揮できないのである。又鏡と共に鈴の音もシャーマン系統の重要な祭具の一つである。世界各大陸における原始宗教は、各々異なつた特徴を持つてゐる。すなわち、北アメリカの原始宗教は守護霊が特に重要視されているし、南アメリカにおいては呪薬が重視されて居り、オーストラリアの一部ではトーテムリズムが重要であ

り、アフリカではフエティシズムやウィックラフトが中心的となっている。アジア大陸の原始的宗教は、シャーマニズムであるということは学界の定説とするところである。棚瀬襄爾氏は「宗教年鑑」(昭和十四年刊七五・七六頁)で「此の原始的宗教は中国の清朝初期における宮中祭儀にまでとり入れられていた事は特筆すべき事象である。興安東省内の満洲族、タタール族及び一部漢族の間の信仰は殆んど全部がシャーマン教で、興安嶺、黒竜江、松花江沿岸のオロチョン族、ソロン族、ゴルドウ族、ギリヤーク族等の間に信仰されている。満洲国の北部よりシベリア地方にかけて居住するツングース族その他の少数民族の間には殆んどシャーマン教を信じている。シャーマン教は天地、山川、動物等の神を祭り、巫が神と人との中間に立って靈媒の働きをなす一種の自然崇拜教で、対象が森羅万象の一切の事物を悉く靈あるものとして崇拜する所謂自然崇拜に深い根ざしを持っている多神教である。日月の運行、四季の変遷、雨雪、風土一として神ならざるはないのである。シャーマニズムの中心であるシャーマンの行事は普通カムラニーという名で知られている。これはアルタイヤンにおける巫者カムが精霊と交通する事であって、『カムすること』即ち狭義における日本の巫術に当る。このカムラニーは私的には病気の治療、死の時、卜占の時行なわれるが、公共的のものとしてはアルタイタールにおけるバイエルゲンの祭儀等があつて、之に類するものは、モンゴルやブリヤットにもあり、ヤクトの秋の祭やサモエドの冬の初めの祭は公共的に巫術が行なわれる典型である。しかし、かかる公共的祭儀に表われる犠牲等の如き司祭的要素乃至呪術的要素の如きは巫術としては第二次的なものであつて、巫術の本質は巫者の靈界への旅に求めなければならないのである。具体的には種々相異があるが、一般に(一)シャーマンの旅への準備、(二)歌太鼓、舞踊、(三)鎮火、(四)沈黙靈交の時やがて帰つて来てシャーマンはその経験を語り、勿論太鼓や舞踊によつて身心脱落してシャーマンが神霊と交通するのがその中心点である。」と述べている。このように、シャーマニズムは、北方大陸民族および東アジア民族を中心としてシャーマンと呼ばれる宗教的指導者が中心となつて、成立する呪術的宗教形態の称呼である。すなわち最も未発達段階における原始的宗教で、さほど他の地方や民族から受ける宗教上の影響の少ない原始形を保つていた状態の宗教形態ということが出来る。しかもその分布区域は比較的純粹にその原始形態を残しているのがバイカル湖の西方地域(ツングース種族)、アルタイ地方(タタール族、ヤクト族、ドルカン族、オスチャック族、サモエド族)から、シベリア平原の東北部から北部全体に及ぶ広汎な面積にわたる地域にわ

たっている。更に、トランス、バイカル地方も、ラマ教、回教、仏教、ロシア正教に圧迫されながらもシャーマン教を保持している地域として指摘される。何れにもせよ、満洲、蒙古、中国、朝鮮においては、他の高度の宗教に圧迫されながらも、複雑な発展をしているシャーマン教が現存しているので、かかるシャーマン教が、日本に伝来していることは当然のことといわねばならない。歴史時代において、匈奴、烏桓、鮮卑、突厥、回乾、吐蕃、契丹、女真、蒙古、高句麗、扶余、更に朝鮮半島の諸地域に行なわれたシャーマニズムが、日本民族の中に行なわれることはむしろ当然で、わが国古代の原始神道はかくの如きシャーマニズムの影響を受けて成立したものと見ることができるのである。

さて、シャーマニズムがもともとアジア大陸の最東北部に居住して氷原と原始林と山嶽に圍繞された古代アジア民族の間におけるアニマティズム的宇宙観が存在し、最も文明と隔離されたチュクチ族などには自然の森羅万象が生きているものとして考えられ、あらゆる自然現象が精霊の存在によるものとする点は、感覚世界の裏面に必ず精霊が存在するというアニマティズム的世界観を成立せしめた。そのアニマティズムの上に立脚して成立したのがシャーマニズムである。人間の死後の世界を肯定しその死霊の活躍する精霊の世界すなわち超自然、神秘の世界を設定したのである。上天、中国、下界の三界思想が中国の人間世界を形成し、非現実の上下二界を靈界として精霊の住所と仮定したのである。この点は日本の神話における高天原、中つ国、根の国の思想と同類の思想であり、シャーマニズムの世界観であるわけである。この立体的世界観はまた原始宗教観における通念であって、仏教やキリスト教の世界観にもこの三界思想は残留しているのである。シャーマンは霊媒者の立場をとる神と人との仲介者である。ブリアートのボウ、朝鮮のムーダン、中国の巫、覡、咸である。日本のミコ、ワタマン、カンナギ、クチヨセである。アニマティズムにせよ、シャーマニズムにせよ、精霊を宥和しようとする手段として呪術が発生することは両者共通の霊媒作業の方法なのである。しかもシャーマンには特定の教義とか教典とかが無く個人々々のシャーマンの呪術予祝によって成立しているのである。

中山太郎氏の「日本巫女史」によると巫覡の語が国史に出たのは推古記の二年春二月の条で、口寄等の男ミコと見られる節がある。社会的には軽視されていたのではなからうか。奈良朝に入って巫覡の活躍は相当に盛んになり、国

史に記されたものによると専ら呪術の悪用の方面のみで、これを律令格を以て禁断し、又は巫覡を遠流した記事が多い。当時支那道教に由来されると見做された鬼道を恐れた節が見られる。すなわち、

一、当時の社会状態が巫覡の行なう呪術に対して治乱をみだす恐れをいだいていた。

二、隋唐の文化を輸入した結果、支那の儒教が極力巫覡の徒を排斥したる風を学び我が国でもつとめてこれにならったのではないか。

三、仏教の興隆は当時神仏習合の端を發し、やがて将来された本地垂迹説の基をなし我国の神々は漸く仏教化せんとした。即ち仏教の教相上儒教と同じく極力巫覡を排斥せんとした。

四、呪術の方法が我が国固有の神意を問うて民人に告ぐるといふ夢占(うけひ)等の範圍を越えて支那伝来の鬼道が民心を恐れしめ社会を荼毒した。

五、巫女、男覡に無頼の徒を増し、売笑者を出し、社会の輕侮を受けた。平安朝に入ると、社会的地位は益々低下して大同二年の「太政官符」の一節にある如き「巫覡之徒、好託禍福、庶民之愚、仰信妖言、淫祠斯繁、厭亦多、積習成俗、虧損涼風」の実状を呈し、更に「和名抄に」は巫覡を遊女、乞食、盜兒と同視して乞盜部に記される程墮落したのである。

六、宮中及び名神、大社に附属した神和系の神子、巫女は我国古有の古格を守り、伝統的な神道巫祝の原形を現在に伝えてくれた。

七、日本の巫祝性は、故に道、儒、仏に神道という合体混合性、複合性にして現代に至っている。

この中山太郎氏の説かれるところは、特に原始神道以後における神儒仏の習合を説かれたのであって、所謂シャーマンのものを本質から申されているのではない。我が国の原始神道とシャーマン教の關係を学問的に考察して学界に報告されたのは山路愛山氏である。氏は、

1 シャーマンの祭儀(神杵を樹てて、鈴を用いることなど)と我国の神道の祭儀との共通性

2 シャーマンの宇宙觀が天地、下界と立体的な三層にあることが我神道の高天原、頸国、黄泉国との三界に言う
と一致する。

3 三神を一祖にして崇拜することが、日韓滿共に同源から出たことをあげ、シャーマン教と原始神道の関係、原始神道が巫女教であること。

の三つの点を指摘されている。又中山太郎氏は、原始神道とシャーマニズムを比較して、

一、我國の巫女の教義の基調を祖先崇拜に置いているのに、シャーマン教の巫女は全く祖先崇拜と交渉のない。我國の巫女を通じて託宣する神の多くは祖先神（始めは氏神であったのが後に社会組織の推移につれて産土神となった。）シャーマン教の巫女に憑くものは祖先神でなく遊離している一種の精霊にすぎない。

二、我が原始神道の巫女の多くは直ちに神として崇拜され（又巫女自身もかく信じていた）ていたが、シャーマン教の巫女はどこまでも精霊と人間との間に介在するものであって、決して神として崇拜されていない。

三、巫女となる形式上の手続きに於て両者の間に相違がある。家の娘が母の後を承けて巫女となるについては彼我共に共通の相続を以てしたようであるが、實際の娘以外の女性（親族又は弟子）が巫女になって跡をつぐには彼我あつては山中にある鏡を拾い得ることを条件とするに反し、我にあつては多く発熱して神懸り状態となることが要件となっている。

と述べられている。しかし、シャーマンと日本の原始神道との相違は多少あるとは言え、その本質における共通性は否定し得ないのである。

三、中国・朝鮮の巫について

さて、中国においては往古から神祭に奉仕するものに巫と祝とがあつた。周代においてはすでにこの両者が相並んで存しているが、その發達の歴史からいえば、巫が古いとされている。周代には巫と祝との外に六官の一である太宗伯という司祭官の制度があつた。しかしその初めには巫があつたのである。その次に祝が出来、最後に宗が出来たのである。この巫と祝との関係は両者に根本的に異なる職能があるのである。

祝は神を祀る時に文辞を以て福祥を祈るのが第一の職務であり、巫は降神を行なうのがその主たる職務である。巫は宗教的で祝は典礼的なものとして区別されている。我が国において司祭者の中臣、忌部阿氏等が司っていた職能は

丁度中国の周代の祝などのとつていた職務であつた。巫の行なう所は、丁度天岩戸の神における天鈿女命の神懸して舞樂するものと同じである。大陸における巫も神前で跳躍舞踊のわざを演じたのである。現代においても大陸北方民族のシャーマンの巫の行為も、朝鮮の巫のわざも皆同類のものである。琉球における巫祝の両者を合せた如き「ノロ」の職能にしても殆んど共通したものである。しかも婦女が神の側近者として奉仕するという点では悉く共通している。シャーマンの職能は先ず第一に司祭者としての職能、又医師としての職能を持つていたのである。孫晋泰氏の研究に拠れば、往古より中国における巫は、上天、下界の二元の精霊又は神との仲介としての存在であつた巫は、やがて現実の人間界の招福除災を司る巫病、巫医としての資格を以て積極的に巫術を行なうようになるのである。この点は我国の巫術が次第に祈禱師。陰陽師の性格を以て民間巫女の職能別の各種巫女群が出現して分布されて行く状態と甚だ類似している。

さて、ここに朝鮮の巫について検討してみよう。朝鮮においては巫はムータン又はムーと言われ漢文字では「巫覡」と書かれている。朝鮮の巫人には**覡**(男の巫)と**巫**(女の巫)との区別があり、北方が主として男巫であるが、南方は主として巫である。従つて女巫の勢力は日韓支共に著しく強大である。朝鮮巫の職はやはり疾病、祈禱、招福除災、禁忌等のことを司り、祈禱所をも設けている。朝鮮人は病氣は悪い靈魂が其人の体内に入るために病氣となると考へている。従つて巫人は之を除くのである。その方法は主として斎主が舞い、二人が樂器を奏してその惡靈を除くのである。男覡は主として卜占を司るのである。又この外に女巫と同じく舞樂神懸りによつて祈禱する。しかし南方の女巫がより原始的で北方の男覡は道教と結びつき經典の如きものさえつくり、占術をも使用する。

四、南方系シャーマンについて

原始安南人の土着信仰の最も原始的な宗教は、精霊崇拜である。精霊は到る所に存在し(特に虎靈信仰とその崇拜は強い)動物精霊の崇拜や樹靈崇拜、岩石崇拜は支那人の崇拜と共に共通した信仰である。しかもその精霊崇拜の背後にはマナイズム、一種の呪力觀を予想し得ると言われている。従つて大地のみでなく天空や星辰まで同じように呪術的活動性を持つものと見なされている。特に彼等の民族的迷信を基底としたものに三界即ち諸位チユビの崇拜がある。三界

又は三府^{サウ}の崇拝^{ウラハヒ}というのは、天府、地府及び水府の各府にいる王達の諸霊を崇拝することであるが、女性が殊に三府の崇拝を行なっている。その司祭が婆童^{ハコ}であり、礼拝所において祭祀をする女巫である。彼等は広く東アジアに分布しているシャーマニズムに見出される巫であり、神霊の指令によって成巫への過程を辿る巫女である。婆童は一般に低い身分の女子であり子なき寡婦又は老嬢に限られている。彼等は荒唐な催眠術や神の託宣や霊媒のことを主務としている。しかし、この三府の崇拝思想は安南人古来固有のものではなく支那の道教及び仏教の影響を多分に蒙っていると考えられている。この外、安南には翁童^{ウシコ}という男呪もあり、霊媒、呪詛を司っている。

又、安南人の農村社会では、農耕儀礼が最も重要な宗教的事実として存在し、守護神の殿堂即ち亭^{テイ}は種々の集合の行なわれる共同家居で村落共同体にとっては重要な祭儀所である。この点は我国の農村における春秋の大祭、村祭と略々類似している。彼等は大地の霊を感じ、他界觀念を有している。守護神は福神^{フクジン}(城隍神)天神又は人神^{ヒトジン}と分けている。このように印度支那における安南人の原始宗教は明らかに支那の大陸系のシャーマニズムに影響された巫祝信仰を有しているのである。

次いで、海南島の女巫信仰についてみると、海南島では、疾にかかると初は多く道士を延いて鬼を祓う。小児には「進胎」と曰って、老人には「進流年」と曰う。疾の癒えない時は始めて医を請い治療する。祭鬼の法は巫女が両手を以て木樟又は木桿の両端を執り、中に秤錘を懸け、喃々として鬼名を念じ、何々の鬼名を唱えて錘が動けば、即ち何々の鬼が祟をなすものとし、酒肉を備えて之を祈禱する。又所謂「打邪鬼」なる者があり、男が病めば女鬼が取つて夫となさんとすると曰ひ、女が病めば男鬼が取つて妻となさんとすると曰い、道士を延いて壇を設け、祓いをし、常に数日を継続する。其の祈礼の語は頗る猥褻を極めるものがあるという。祓が罷むと病人の前で大火把一根を燃し、檀香粉を取り、之に炒いた米糖を焼いたものに混和し、火把の上に撒し、火花を發せしめて病者を扶けて之を視せしめ、病人が懼れると之を撤去する。又、人が疾病に懼れば多くは生草、薬湯を飲み、癒えざれば巫を延いて鬼を捉う。其の法は繩を以て鶏卵をつなぎ、之を竿頭に懸け、両手で之を承けて其の動き方を見て、鬼の有無及び鬼の種類を卜する。祭をなす供物としては、牛及び豚羊を殺し、均しく巫意に従う。祭が終れば親族を迎えて之を聚食する。之を「食鬼」と曰う。殺す所の牛豚の角又は歯骨は必ず之を屋中に掛けるが、小者は或は之を病人の頸間につなぎ、

永く取り去らない。但し此の風俗は各処不同であり、中部の黎人は獸骨を佩びるものは極めて少く、病人にして若し鬼を祭るの力がなければ、或親族から家畜を送つて之を行い、或は病中に鬼を祭るの力がなければ巫に依つて鬼に約し、収穫を俟つて後再び祭り、病人の平癒を祝する。故に秋冬の間収穫後に鬼を祭ることは最も多い。又巫の言をきいてみだりに殺人を事とする者もある。病人が鬼を祭り、巫を延いて神を降すときに、神が人から暗に害せられると曰えば、全村の老幼男女を招集し、ひとしく一処に集り、神はすなわち一人を指定し、是が病人を疊害するの人だといへば、にわかにも公憤を起し、此の人を毆投し、之を半死に至らしめ、かついで之を生き埋めにする。間々一人の病者があつて、數人を誣殺することもある。(井出季知太著「改訂海南島誌」参照)

次いで奄美大島、琉球の巫女とシャーマンとの關係であるが、奄美大島は琉球服属前に大和朝廷と親交が篤かつた。日本書紀に記されているが、この外琉球發見のアイヌ器物三十八点の發見で明らかにされた如く、三千年前大和民族北進前九州一帯のアイヌが大島から琉球まで南下したことを実証している。又、大島語中にアイヌ系語音があり、南島民族にアイヌの血液で複合していることを人類学者は説いている。又笠利、竜郷両村で現在使用の刳舟は古代大和民族の使用した縫舟時代の刳舟である。又多くの和詞と和詞系の脱音語、訛音語、重複語が大島語の基本となつて古代和詞の原型保存をなしているから、大島にはアイヌの次に大和民族が移住して複合したと考えられる。従つて、琉球と日本とのシャーマニズムの共通性は南方的要素の点で一致しているということが可能なのである。又、琉球研究家の宮良当壮博士はその著「南島叢考」の中で、糸満が海人部族であることを説かれた興味ある一説を示している。「たまく、後慶良間の座間味島を調査した時、今まで此島の名を「ザマミ」と思つていたのに対して、島人の人々が「ジャマン」と称するのを聞いて思い当り、ジャマンの「マン」とイトウマンの「マン」とは關係が無いのだろうかと考え始めた。即ち糸満はイトウマミの転化したものではないか。若しそうだとすれば、そのイトウマミは何であるうか。そこである／＼と考えた。結局、イトウマン即ちイトウマミはイユ、トウイ、アマニ即ち、いを、とり、あまべ(魚捕海人部)という言葉の移転したものであろうという考えを抱くに至つた。」と言われている。この一説によつて、古琉球と北九州海人部との關係でも示唆するもので、海人系の信仰形態の類似点についてもその基底をなすものと考えられる。

以上の如く、南方系諸島のシャーマンについて通観してみると、すべて、特別な教義、教典を持たぬ巫祝信仰が原始的宗教の状態が分布され信仰されていることが分明されるのである。かくの如き北方系南方系の両系シャーマンが日本列島の古代において、重層混合された事実是否定し得ないのである。従つて私は日本の上代古典の巫祝性を研究するためには、両系シャーマンの巫祝性を明らかにせねばならぬことであると共に、海人族の研究を徹底せねばその本質的解明は為し難いものと考えられる。

五、日本の巫について

以上日本の周囲民族の外辺的なシャーマニズムの位置と性格とについて概観したのであるが、次いで日本の巫祝性の時代的発展と衰亡とについて、その民間巫女の職能と巫祝性について述べることにする。我国における巫祝信仰を上代古典の中から抽出して、民俗学研究を成就せられた学者は、折口信夫博士、中山太郎氏、高崎正秀博士、堀一郎博士、柳田国男氏の諸先覚である。特に中山太郎氏は、折口博士の卓説を骨子として之を歴史的に検討された「日本巫女史」一卷を遺されている。私は如上の諸先覚を研究を基調にして以下日本の巫女の史的経過を述べることにする。

先ず最初に民間巫女の職能として見られるものに、市子(いちこ)と口寄(くちよせ)の語がある。平安末期の藤原明衡の「新猿楽記」には「四御許者^{四御許者}巫女也、卜占、神遊、寄伝、口寄之上手也」とあるが、王朝末期に巫女が存在して卜占、神遊、寄伝、口寄等の四種の職能を持っていたことがこの記事によつて示されている。三河では「みこ」「みこどん」とも称し、神楽殿で舞をする巫女で、悉く村落の処女で、市子はクチヨセとも言ひ、処女のみでなく、未婚の老女の場合もある。三河地方では知多郡白沢福住八幡の附近、幡豆郡地方、碧海郡南部地方(海人族の住む処)では「かまはらひ」「湯とり神子」という巫女があった。又伊勢には伊勢みこ、熊野には熊野みこの二通りがあった。和訓栞には「御師^{ミジ}」に(陰陽師から神人となつた)についての記事がある。

源氏玉鬘の巻に見えたる初瀬の僧を指せり。御師の義、浮屠氏祈禱をするものの称なり。今伊勢の神人を通じよぶも、東鑑に年来御禱の師権祢宜光親神主、及び公卿勅使記に本宮の御師と見え詔刀師職などいへど、浮屠氏に倣へ

るものなり。檀那の称に対していとあやし。御湯殿の上の日記に、かものさた久し。もとの如く御しになさるとも見ゆ。西土に師巫といへるも、師は男みこ、巫は女みこなれば、いせの御師の称も相似たり。ちなみに弘安元年の公卿勅使記には「無_レ風雨難_レ、無_レ為_レ可_レ遂_レ使_レ節_二之_一由、殊_{可_レ祈_レ請_二之_一旨、可_レ仰_二本宮御師並祭主宮主_一」}

とある。しかし、この様な神祇に奉仕していた御師と異なつて、イチコ、口寄は死者の言を取次ぐ職能のみを継承して一種の下級巫女群を発生せしめている。甲府の市子は卑称されて「白神筋」などともいわれている。或いは時に「狐使い」「管使い」などともいわれ、極めて社会的地位の低い巫女群であつた。このイチコの群はアガタミコ、梓ミコ、シナノミコ、降巫等と呼称され、梓弓をはじきササラやハタキを振り、又鼓をたたいて死霊の亡者語りを常としたのである。

又、東北地方特に日本海寄りの地方ではイタコ、イダゴ、エチコ、イチコと言ひ、又山形庄内地方ではミゴ、ミコとよばれる。又津軽地方ではアリマサ、秋田地方ではインチゴ、「座頭嬢」「座下し」などの異名もある。又秋田地方では盲目の巫女に対して眼の見える者をアサヒと呼び、口寄巫女類似のものをゴミノ、「八卦置き」ともいふ。彼等の一部の者はオシラ神を祭り、オシラ祭文を誦する。そして「神おろし」「神憑り」の職能を持つていたのである。平安時代から室町時代にかけて修験道派の混淆をみて次にその初期の純粹さを失つて行つたことは歴史に徴して明らかである。

次にクグツメ(傀儡子)の巫女系統である。和名類聚抄には「傀儡師、唐韻云傀儡久久豆樂人之所_レ弄也」とあり、和名抄に「巫_レ禱說文云巫加奈岐祝女也_レ文字集略云、禱乎加牟奈岐男祝也」ともある。クグツメははじめ神社に近く附随し万才、獅子舞、神樂を舞う巫女であつたが、次第に墮落して、遊女的巫女となつて行つたのである。このクグツメは民間芸能を村から村へ伝えた民間芸能の伝播に非常な役割をなしたのである。神樂舞に尾を引く「伊勢音頭」や「羯鼓踊」は巫女舞の古い遺物としてやがて田樂への道をつけたのである。折口博士は「田樂には重要な楽器としてびんざさら羯鼓及び太鼓が用いられた。後に此羯鼓のことを田樂という様になつた」と言われ、更に山姥——巫女——八百比丘尼——伊勢比丘尼——市子——くぐつめの系統を示されている。巖島神社の鳥喰の神事で、神前へ着船して太々神樂があり、神官の家で饗の膳山海の珍味を料理をして饗応する。之をもどり蛭ヒメズという。其夜宮島の座頭遊女

などが来集して祝儀を諷い、神酒で宴を催す神事がある。折口博士は「市」について

明日より春になる日に来て、其村の広場で舞を舞ひ、土地の神の靈を鎮魂して帰る。其処を市といふ。市庭に山人が山づとを持って来る。此場所といふのは大体多くは山と平野との間で、三輪山に対して長尾の市があり、その邸を長尾市守と言ひ、又椿市、たづ（にはとこ）の市、（長谷に近い）等がある。市の名には植物の名が多い。市は山人のもつて来る木に關係多く、山づとの第一のもので椿市で方々にある。

山づと——杖、榊、ほや、やどり木、柏、羊齒、ゆづり葉——正月用「タブー」田樂、能樂、曲舞、幸若舞、千才——白拍子、猿樂、百万山姥、百万遊女、山姥の舞——みこの舞、足柄明神の神樂歌、みこ舞——宇土浜の天人舞、三条の浦の舞、市姫——山姥——後に恵比須様——山人、古事記に大市姫、山陰の或地方では山姥Ⅱ大市姫：
：市来島姫、而して、海人部系統の遊女としてクグツがある。

と言われている。折口博士はこのクグツメが海人族系の遊女であることを断言されている。ここにおいて、筑前志賀の島の祭りに人形をのせて沖に出て海底をのぞかせる式、即ち海人の宰領の阿知女と磯良海神が問答する神樂歌の磯良の舞はまさにくぐつの人形まわし——えびすがき、淡路人形、西の宮の神人——かいま女——偶人咒術を示す一連の系統を物語るものである。かくの如き傀儡子は次第に墮落して平安朝末期には男は主として木偶を舞わし、一種の幻術を以て女は主として遊芸売淫の事を以て漂泊した職能民となったのであろう。

五、むすび

以上各項にわたって、日本の原始的宗教の發生的問題を巫祝の性格の上で検討し、日本古来、特に上代文学の内面に侵透しているこの巫祝性を明らかにせずとその文学性のみを強調しても、それは極めて片手落のきらいがあることを知らねばならない。本稿は極めて概説的に叙述したが、原稿を急に満たすために下命されたので、かくの如き体裁となったことをお詫びする。